

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 27 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24320037

研究課題名(和文) 西洋舞台芸術の解体～アジアから欧州を読み解く対話と身体芸術論の変遷～

研究課題名(英文) Dissection of Western Performing Arts: Dialogue for Analysis of the West from an Asian Perspective and the Transition of Performance Art Theories

研究代表者

北村 明子 (KITAMURA, Akiko)

信州大学・学術研究院人文学科系・准教授

研究者番号：40334875

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,700,000円

研究成果の概要(和文)：舞踊・身体表現、映像表現、音楽表現を中心とした領域横断的な舞台芸術創作の方法論について、アジア社会が享受した際の矛盾と変化を調査。伝統芸術と現代芸術表現の繋がりに着目し、現代の舞台芸術がいかなる問題意識と発展性を包括しているかを思考。研究対象は多様な文化背景を持つインドネシアを中心とし、東南アジアの伝統武術・舞踊・音楽における技法と現代におけるその発展性について、フィールドワークを通してリサーチ・分析を行った。更に、芸術家、専門家らとのアジア国際交流を基盤とした実践的舞台創作の考察を行った。

研究成果の概要(英文)：This is research on contradictions and changes in methodologies for the creation of cross-regional performance arts, centered on expressions through dance, body, film, and music in the adoption of Western performance art theories by Asian societies. It focuses on the connections between traditional performance arts and contemporary expressions as well as studies the awareness and potential of contemporary performance arts. This research examines and analyzes traditional martial arts, dance, and music methodologies and their potential in the contemporary world through field research that targets Indonesia which has a diverse cultural background, and other Southeast Asian countries. The research also extends to a practical application in performance art productions based on international collaborations between artists and specialists in Asia.

研究分野：舞踊学、身体論

キーワード：舞台芸術論 ダンス表現 身体論 メディア論 比較文化論 国際研究者交流 国際情報交換 文化政策論

1. 研究開始当初の背景

現代、舞踊は、人間の身体の経験と思考の深層を融合させ、身体の思考を切り開いていく最も重要かつ豊かな芸術表現であることが世界的に認識されてきた。その一方で、現代の舞踊表現において、これまで自明とされてきた身体の技法や創作方法、演出法、観客とのコミュニケーション方法等を新たな枠組みから思考する必然性も生じている。そのような背景を踏まえ、西洋で発展してきた舞台舞踊芸術、現代の舞踊表現の創作理論・手法に、アジアの文化的背景や身体観から問題意識を持つ創造性に向けた、リサーチ・分析、実践研究の積み重ねが必要とされていた。異なる国籍・宗教・思想を超えた社会文化背景の差異や類似点を多層的に思考し、異文化を読み解き、開いていく身体表現創造を前提とした実践研究交流から、フィールドワークの特性を生かした研究成果が必要であると考え、研究計画を立てた。

まず、研究代表者が実践研究発表やフィールドワークで経験を持つ、東南アジア、とりわけインドネシアにフォーカスを当てた。そして、伝統-現代に脈々と残るアジアの土地の伝説・神話、各地域の伝統武術・舞踊・音楽と儀礼やその周囲についての調査を通して、人間の身体の「いま、ここ」の表現に新たな視点を投げかける試みとして本研究を開始した。

2. 研究の目的

身体表現を中心とした領域横断的な舞台芸術創作の方法論について、西洋的な芸術的理論や美学をアジア社会が享受した際の矛盾と変化を調査。伝統武術、舞踊、音楽などが現代の日常生活や儀礼等に欠かせない役割となっている東南アジア、とりわけ、インドネシアの多様な文化背景に着目し、インドネシア各地域における武術、伝統舞踊、伝統音楽についての技法と、現代における発展性について、フィールドワークを通してリサーチ・分析。また、複数の東南アジアの国々の伝統武術、舞踊、音楽をインドネシア周辺地域であるシンガポール、マレーシアやカンボジア、ミャンマー、北東インドなどへの調査も射程に入れた比較文化論的視点から、伝統芸術と現代芸術表現の繋がりに着目し、現代の舞台芸術がいかなる問題意識と発展性を包括しているかを考察する。さらに、これらの研究結果を踏まえ、芸術家、専門家らとのアジア国際交流を基盤とした実践的舞踊創作の方法論の考察と実践を目的とする。

3. 研究の方法

本研究では舞台芸術研究における理論と実践を融合させ、大学研究施設を研究基盤とした上で、研究代表者の振付家としての活動経験基盤を利用し、国際的共同制作推進のため海

外の劇場、研究機関の協力体制と共に研究推進した。研究計画は以下の(1)～(6)のようなフローで推進し、長期的な視野によって達成される内容を、国内外で実践発表し、そのフィードバックと変化を検証する流れを基本とした。

(1) アジアの身体表現に共有されたテーマ設定をその社会背景、芸術領域背景をリサーチ・分析する。インドネシアを中心とする伝統武術や舞踊等、芸術領域のフィールドワーク1を実施。

(2) (1)について、比較対象として、東南アジアの国々を対象とし、フィールドワーク2を実施。また、研究代表者、分担研究者がこれまでに研究発表を行った経験のある国などを対象としながら、北米や欧米の文化圏との比較研究も行う。

(3) (1)、(2)(4)について、研究会を実施。リサーチ結果を共有し、そこから見えてくる課題から、舞台創作のためのコンセプト・作品創作方法論・身体表現技法・発表方法についての企画構想を設計。また実践研究発表結果についての議論、意見交換を行い、今後の課題を明確化する。

(4) アジアにおける舞台創造の新たなコミュニケーション形式を求めている研究機関・劇場を絞り、(3)を共有しながら共同研究プランを進め、国際共同制作プロジェクトの新形式ケーススタディーとして、複数の国・劇場・研究機関にて実践研究発表を実施していく。

(5) (1)～(4)の過程についてのドキュメンテーション。それらを芸術文化教育・研究機関に、今後の国際共同制作の新しい形式例としてアーカイブとして記録に残す。

4. 研究成果

研究対象は多様な文化背景を持つインドネシアを中心としたその周辺、東南アジアの伝統武術・舞踊・音楽における技法と現代におけるその発展性について、フィールドワークを通してリサーチ・分析を行った。また、東南アジアの芸術家、研究者らとの国際交流共同研究を基盤とした、実践的舞踊創作の方法論の考察と実践発表を行った。さらにそれらの結果を踏まえ、研究会を実施し、伝統-現代の芸術表現技法の融合について、実践的舞踊創作・国際共同制作の方法について、記録・アーカイブ化の方法について議論を行った。

(1) フィールドワーク1

① インドネシア武術ブンチャック・シラットの身体技法について、Perisai Diri 派(Sigit Praskoso 師範、Both Sudargo 師範)について、ジャカルタでの基本的な身体技法、訓練法、呼吸法や理論をリサーチした上で、流麗な演武でも知られているスダ地方でのSilatの各流派のリサーチを主とした。

Panglipur, Chikalong (Aziz Asy'arie 師範), Garis Paksi (Gending Raspuzi 師範) などスダ地方における各流派の舞踊的側面と武術、音楽の関連性についての映像資料、文献資料を現地にて収集。また、実践を交えつつ専門家らとの情報交換した。さらに、国内に戻り、Panglipur 派については、信州大学人文学部にて Erik Rukmana 氏、セゾン文化財団森下スタジオにて Bang Bang Trisna Irawan 氏らによるワークショップを実施。演武や攻撃・防御の型・技法の実践リサーチを行なった。Perisai Diri 派については、Soesilo 師範、Sigit Praskoso 師範の来日に際し、型や動きについての実践解説を公開ワークショップとして実施し、その技法を理論的に分析・考察できる映像資料撮影を行なった。専門知識や現地の研究者受け入れ団体については、日本ブンチャック・協会会長早田恭子氏、ブンチャック・シラット、プリサイ・ディリ派 Soesilo 師範、Sigit 師範、及び、文化人類学専攻、総合研究大学院大学所属今村宏之氏のコーディネートにより、現地調査の協力を得た。

② 舞踊・音楽、伝統と現在

インドネシアの伝統舞踊、音楽について、現地の劇場機関 (Komunitas Salihara)、舞踊家 (Rianto, Danang Pamngkas, Luluk Ari)、音楽家・影絵師 (故 Slamet Gundono) らの協力を得て、フィールド調査を行った。ガムラン等の伝統音楽に加え、クロンチョン、ダンドゥット他、多様なジャンルの融合と進化を果たしてきたインドネシアの音楽についての現地調査を実施。カセットテープや録音環境などにも着目し、その多様性が、エレクトロニクス、ヒップホップなどの現代の音楽と伝統音楽のつながりにどのような影響があるかについて専門家らのインタビューを行った。また、その土地における生活音、環境音をフィールドレコーディングし、現代の舞台芸術作品における音楽の要素について新たな視点から考察を行った。

音楽家・影絵師である Slamet Gundono との共同研究では、ソロ市、チルボン市の Slamet 氏の各スタジオに長期滞在し、現代的アレンジを加えたワヤンクリ、ガムランなどの演奏形式を踏まえた現代音楽の創作過程についての現地調査を行った。またそれらを踏まえ、現代舞台舞踊作品の構成や、ワヤン・クリと映像表現の融合方法、さらに作品全体の音楽構成、即興音楽の可能性についての考察を行い、その結果を実践研究発表に反映させた。

(2) フィールドワーク 2

東南アジアにおける、舞踊、武術の身体技法、伝統芸能、音楽的な文化的繋がりを考察し、ミャンマー、カンボジア、インドにてフィールドワークを実施。

① ミャンマーの視察では主に Thaing Bando

武術における身体技法や少数民族シャン族の伝統武術儀礼の演武について、ミャンマー初の女性師範 Rupa Thein の協力を得ることで、各協会や地域のコミュニティの内部調査が可能となった。Thaing については、舞踊と演武の密接な関係性を持つ訓練法について、シャン族の伝統武術については、伝承危機などの問題など各課題について、師範らにインタビューを行った。ミャンマーの伝統舞踊・音楽・儀礼のリサーチについては、国立民族博物館、田村克己名誉教授にサポートを受け、現地調査では通訳家兵藤千夏氏のコーディネートの下、様々な実践家とのコンタクトが可能となった。大衆芸能ザッポエについては Tatkatho Ko Zay Zatthabin 主宰の Ko Zay 氏、伝統音楽サインワイン、ブルマ伝統舞踊については国立ヤンゴン芸術文化大学の複数の教員、兼現役芸術家らに協力を得てインタビューと交流ワークショップを実施。マンダレー近郊のナッ信仰儀礼タウンビョン祭の現地調査では、儀礼を体験すると共に、そこで行われている舞踊、音楽について専門家、舞踊家、音楽家らのインタビューを行った。

② インドのコルカタ、マニプールでは、インド 4 大舞踊 (カタカリ、パーラタナッティ、カタック、マニプリ) の中でも、東北インド、アッサム地方の民族舞踊から生まれた古典舞踊マニプリや、マニプール州のメイティ族により作られた武器使用を基本とする武術 Thang-Ta と演武と音楽リズムの関わりをリサーチ。Thang-Ta については、コルカタでマニプールの文化の普及活動をする、Anjika Manipuri Dance and Martial Art School と、マニプール公的組織 HUYEN-LALLONG MANIPUR THANG-TA CULTURAL ASSOCIATION と個人で普及活動をする Ranjeet Chingtham 氏によりそれぞれ技法を学び、その伝授や訓練法、身体技法に対する視点の違いについて、実践的調査を行った。また Thankg-Ta についての学術書 “Principles of Movement in THANG-TA” の著者 L. Kokngang Singh 氏にインタビューを行った。伝統舞踊・音楽の現在を調査するため、Visva Bharati University の視察を行った。さらにマニプールの伝統音楽保存活動を推進する音楽家 Mangangsana が主宰する組織団体 LuiHui にて、伝統音楽の実践調査を実施。他、様々な芸術団体とのネットワーク紹介を受け、各団体、教育組織の視察を行った。

③ カンボジアでは、アプサラ舞踊、精霊伝統音楽について、カンボジア王立芸術大学や芸術団体 Amrita Performing Arts, Cambodian Living Arts 等の視察、芸術家、研究者との交流を行った。また、現代舞踊、サーカスの現在を知るため、ヒップホップダンスの学校 Tiny Toones (プノンペン) やサーカスグループ Phare Ponleu Selpak (バタンバン) の視察を行った。現地調査では、写真家 Kim Hak

氏や映像作家 Davy Chou 氏らなど、写真・映像研究の交流から記録メディアが提供するその土地の歴史のアーカイブや同時代に関わる芸術家らの記憶についてインタビューを行った。Amrita Performing Arts では伝統舞踊の技法を身につけた複数の舞踊家との振付共同作業を実施。他、伝統音楽 Smot や精霊儀礼の音楽のフィールドレコーディング等、音声・映像記録を保存。

④ シンガポール、マレーシア、香港では、舞踊振付研究についてのレクチャー、ワークショップを実施し情報交換を行った。マレーシアでは東南アジア諸国、タイ、ベトナム、フィリピン、他からの参加者である芸術家らとの交流も深め、各国の伝統芸術と現代芸術表現の繋り、発展性についての意見交換などを通し、インドネシアでの調査結果を客観的な視点で見直すことができた。

⑤ 欧州（ドイツ、フランス）、北米（カナダ、アメリカ合衆国）にて、研究交流会を実施。とりわけ北米では、FESTIVAL ACCÈS ASIE、Concordia University、Tangente 他、舞踊舞台芸術に関わる公的機関や、Asian Cultural Council NY などとの公的機関との交流を通し、これまでの東南アジアにおけるリサーチ結果の情報交換や多大なるリサーチサポートを受けた。

（3）研究会の実施

アジア国際共同舞台制作を課題に、インドネシアの身体技法、芸術文化、社会背景を中心としたリサーチを目的とする、スタディーグループを隔月に実施。コーディネータの土谷真喜子氏とディスカッションし、各会、異なる課題について、講師によるレクチャー、調査報告会を行った。

また、それぞれの報告を踏まえた上で、舞台創作の構想や、実践発表結果についての議論を行い、それらの内容を文書化し、プロジェクト特設 Web サイトへの記載をし、ドキュメンテーションの一部としてアーカイブ化した。

インドネシアの伝統の中で継承された身体文化を現代舞踊へと接続することは、現代人の身体とインドネシアのそれとの異質性をどのように架橋するかという問題を持っている。作品の上演は、それ自体、問題についてのひとつの解答の試みであった。日常における身体性は、構造主義が示したように構造によって規定されている。われわれは構造に依存した枠組みにおいて認識をするため、現代人の身体が「インドネシアの伝統」を見る視点は舞台作品においてなお「観光」という枠組みをとらざるをえない。作品において、現代日本の身体性とインドネシアの伝統的な身体性との「出会い」と「対話」を提示し、認識の枠組みの変容をもたらすような仕組みを取り入れることで（この点において精神分析的な

研究が一定の貢献を果たした）、観客の身体自体を「対話」へと開く試みを実施した。研究会では、作品における「実験」の成果をメタ的に分析し、次の作品の制作に資するような分析の結果を示した。（荒谷大輔）

（4）インドネシアから舞踊家(Luluk Ari 氏)、演劇演出家(Yudi A. Tadjudin 氏)を招聘し、国内の舞踊家らと共に、現代舞踊における振付・演出方法について、実践研究を通して考察。各地域におけるフィールドワーク研究を踏まえ、舞踊、音楽表現の伝統と映像領域を含める現代芸術表現の融合方法論を考察した結果を、舞台芸術における企画・構成・演出方法論としてまとめた。さらにその実践研究発表を、東京、兵庫県（新神戸長田市）、長野県（茅野市、松本市）、シンガポール、香港、インドネシア（ジャカルタ市、ソロ市）にて実施した。

さらに、カンボジアのアーティストを国内に招聘(Kim Hak 氏、Chy Ratana 氏)し、これまでのリサーチ結果を元に、写真、テキスト、舞踊、音楽が身体表現に与える影響を探求し、現代の舞台表現へと繋がる実践研究発表を国内にて実施した。

（5）ドキュメンテーション

① HD 1920x1080pixel 23.976fps 収録時 240fps によるスーパースロー収録、収録機材 映像収録:Sony NEX-FS700 1 台レンズ Sigma 10-20mm F4-5.6 EX DC

② 撮影:FullHD での実践研究発表収録、動画収録機材 Panasonic GH3、GoPro、静止画記録機材 Canon 7D、記録資料用 DVD 制作

③ 創作記録(FullHD)、動画収録 (Panasonic GH4、DJI Osmo、GoPro 静止画記録 Canon 7D ドキュメンタリ)。4K(UHD)と FullHD でのステージ収録(Panasonic、Sony、メーカー提供の Log(対数)カーブを用いた広ダイナミックレンジ収録、Look Up Table カラープロファイルによる色空間管理による高精度 Collar grading。

④ 創作プロセス創作のための場所の提供と創作の記録。創作プロセスの記録 4K(UHD)と FullHD での稽古場での収録動画収録機材 Panasonic GH4、DJI Osmo、GoPro 静止画記録機材 Canon 7D ドキュメンタリ、広報用の素材として使用。本番の撮影について 4K(UHD)でのステージ収録。Panasonic、Sony 共にメーカー提供の Log(対数)カーブを用いた広ダイナミックレンジ収録と編集時に対応した LUT (Look Up Table) カラープロファイルによる色空間管理を行うことで、暗いステージでの色再現と Collar grading、ノイズ処理を追求した。動画収録機材 Panasonic GH4(3 台)、Sony RX10 II(1台)、GoPro 静止画記録機材 Canon 7D 記録資料用 DVD 制作と Youtube 一般公開

用映像として使用。
(糊沢順)

⑤ インドネシア伝統芸能ワヤン・クリ影絵とグラフィック、CGアニメーション技法の融合。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLztXyf2fD5ueJ7ojzRpRqOJQOk88JYU-L>

(兼古昭彦)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 10 件)

① 「近代の根を掘る：自由意志・観念・自然権」, 荒谷大輔, 江戸川大学紀要 第 27 号 2017, pp. 01-11, 査読なし

② 「キアスム：ジャック・ラカンにおける認識論と存在論の交錯」, 荒谷大輔, 江戸川大学紀要 第 26 号 2016, pp. 09-17, 査読なし

③ 「『現実的なもの』の原景：ラカンによるフロイト『心理学草案』読解」, 荒谷大輔, 江戸川大学紀要 第 26 号 2016, pp. 01-08, 査読なし

④ 「『経済』における倫理学の可能性：具体的な実践例に即して」, 荒谷大輔, 江戸川大学紀要 第 25 号 2015, pp. 15-20, 査読なし

⑤ 「ラカンにおける対象概念の位置付け：中期ラカンを中心に」, 荒谷大輔, 江戸川大学紀要 第 25 号 2015, pp. 01-13, 査読なし

⑥ 「アートでつなぐ2つの国 インドネシアと日本 | 日伊共同制作ダンス公演 To Belong インタビュー」, 北村明子, さらさ SARASA インドネシア生活文化情報誌 vol 121 2014, クラウンライン出版, pp. 42-43, 査読なし

⑦ 「インドネシア国際共同製作企画 To Belong Project の軌跡」, 北村明子, 公益財団法人セゾン文化財団 view point67 号 2014, pp. 01-05, 査読なし

⑧ 「仕事人の眼」後編, 北村明子, 華道 2013 8 月号, pp. 36-39, 査読なし

⑨ 「仕事人の眼」前編, 北村明子, 華道 2013 7 月号, 2013, pp. 36-39, 査読なし

⑩ 「インドネシアの精神性表現」(インタビュー), 北村明子, オンステージ, 読売新聞, (2012. 09. 05), 査読なし

[学会発表] (計 2 件)

① 「姿勢-器としての身体のゼロ地点-：対話し、表現する身体のある場所」, 北村明子, 美術解剖学会, 2017. 07. 15, 東京芸術大学美術学部, 東京都台東区 (発表確定)

② 「ダンスプロジェクト *Cross Transit* への旅～カンボジア, ミャンマー, マニプールの身体技法の誘惑～」, 北村明子, ACC トーク招聘講演 2016 年 5 月 20 日, 公益法人セゾン文化財団森下スタジオ, 東京都江東区

[図書] (計 2 件)

① 「経済の哲学—ナルシスの危機を超えて」, 荒谷大輔, せりか書房, 2013, 総ページ 254

② 「羅漢『アンコール』解説」, 荒谷大輔, 佐々木孝次, 他, せりか書房, 2013, 総ページ 303

[その他]

舞台芸術作品

① *Cross Transit project*, 北村明子 (振付・演出), 兼古昭彦 (映像制作), まつもと市民芸術館, シアタートラム, 80 分 (2016. 9. 29-10. 2)

② *To Belong project/Suwung*, 北村明子 (振付・演出), 兼古昭彦 (映像制作), 青山円形劇場, Dance New Air フェスティバル, 80 分 (2014. 10. 03-05), ゲーテハウス ジャカルタドイツ文化センター, (2014. 12. 16-17), インドネシア国立芸術大学スラカルタ校 (2014. 12. 20.)

③ *To Belong-cyclonicdream*, 北村明子 (振付・演出・出演), 兼古昭彦 (映像制作), 茅野市民芸術館 (2013. 11. 28.-29), UCC Theater Singapore, NUS Arts Festival 主催, 80 分 (2014. 3. 18.-19)

ホームページ等

① 国際交流基金

Performing Arts Network Japan “Akiko Kitamura’s new horizons, Collaboration with artists from Indonesia” インドネシアと協働する 北村明子の新境地
http://performingarts.jp/E/art_interview/1303/art_interview1303e.pdf

② Cinra.NET 「インドネシアと大激突 北村明子 × 森永泰弘 対談」
<http://www.cinra.net/interview/2013/10/29/000001.php>

③ 「北村明子『To Belong/Suwung』インタビュー」, 北村明子, All About

2014. 9. 25, pp01-08

<https://allabout.co.jp/gm/gc/447106/>

④ *To Belong project* web サイト
<http://www.akikokitamura.com/tobelong/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

北村 明子 (KITAMURA, Akiko)
信州大学 学術研究院人文学科系・准教授
研究者番号：40334875

(2) 研究分担者

糊沢 順 (KURUMISAWA, Jun)
千葉商科大学・政策情報学部・教授
研究者番号：50337713

兼古 昭彦 (KANEKO, Akihiko)
東京家政大学・家政学部・教授
研究者番号：40626636

荒谷 大輔 (ARAYA, Daisuke)
江戸川大学・社会学部・教授
研究者番号：40406749

(3) 研究協力者

村尾 静二 (MURAO, Seiji)
国立民族学博物館・学術資源研究開発センター・外来研究員
研究者番号：90452052

今村 宏之 (IMAMURA, Hiroyuki)
総合研究大学院大学・文化科学研究科地域文化学専攻・博士後期課程

土谷 真喜子 (TSUCHIYA, Makiko)
株式会社リーワード

早田 恭子 (SODA, Kyoko)
一般社団法人日本ブランチャック・シラット協会会長, 宗教法人日本ムスリム協会理事